

4 乳用牛長期不受胎牛への新鮮胚移植を活用した 和牛増頭の取り組み

中丹家畜保健衛生所

井上 巖夫 黒田 洋二郎¹⁾ 宮城 信司 岩本 尚史

1) 現 南丹家畜保健衛生所

【はじめに】当所では、平成21年から管内の和牛繁殖農家、農業協同組合（JA）、関係機関と協力して、和牛から採胚、乳用牛長期不受胎牛（不受胎牛）へ新鮮胚を中心に移植する方法で和牛増頭に取り組んでいる。【方法】供卵牛（黒毛和種）の過剰排卵処理と平行して、JAと連携し、不受胎牛の繁殖検診で黄体を確認後、PGF2 処理で発情同期化を行い受胚牛を準備した。採胚日に主に新鮮胚をJAの受精卵移植（ET）師が移植した。新鮮胚が不足した場合には、凍結胚を移植した。【結果】平成22年からの3年間で延べ29頭採胚を実施、正常胚347胚を回収した（12.0個/頭）。そのうち、149胚を移植、61頭が受胎した（受胎率40.9%）。新鮮胚の受胎率は41.1%（51/124）、凍結胚は40.0%（10/25）であった。人工授精（AI）を実施するも受胎しなかった86頭（平均分娩後日数285日、平均種付回数2.1回）に移植、32頭が受胎した（37.2%）。発情が不明瞭な牛63頭（同161日、同0.1回）では、29頭が受胎した（46.0%）。そのうち、35頭の分娩を確認し、25頭が子牛セリ市に上場した。【今後の課題】不受胎牛の活用は受胚牛の確保に有効な方法であったが、新鮮胚移植では受胚牛の効率的な確保対策や妊娠牛の流産等事故軽減対策が課題であり、今後も和牛増頭のため、その改善に向けた取り組みを進めていきたい。